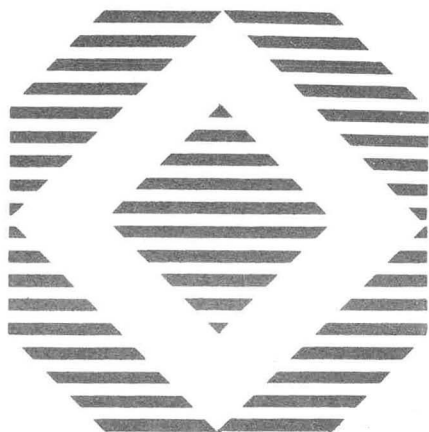


講座

日本文学の争点



1 上代編

明治書院

監修
久松潜一
麻生磯次
市古貞次
五味智英
編集
©五味智英

講座 日本文学の争点 1 上代編

¥680

昭和44年1月20日 初版発行

発行者 株式会社 明治書院
代表者 三樹 彰

印刷者 株式会社 柳沢印刷所
代表者 柳沢 一郎

発行所 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町 1-16

郵便番号 101

電話・東京(03)294-5336(代表)

振替口座 東京 4991 番

製本 正文社

は し が き

国語教育にたずさわっている人々も含めて、国語・国文学の研究人口は、戦後大幅に増大した。同時に、戦前には光の当てられなかった、あるいは、研究を制限されていた諸分野への進出も、当然のことながら花々しくなされてきた。方法的にも、戦前の体制内での研究に対する批判・反省を含めて、研究方法や態度についての真剣な論議も重ねられている。

こうして、これまで発表されてきた、または、現在発表されつつある研究・報告の量はおびただしい分量にのぼっている。今やこれら全部を読み、理解し整理して、その上に立って自己の研究を推し進めるということは、不可能に近いことなのである。といって、そのことを閑却して、ひたすら、自分の専門の分野にのみ目を注ぐならば、その結果はきわめて視野の狭い、偏ったものとなり、みずから自分の業績を正しく評価することが不可能となり、ひいては他の業績に対する正当な評価も不可能となるにちがいない。そして、このことは、学界全体の、また国語教育界全体の進展にも直接影響を及ぼす重大事であるといわざるをえないのである。学界・教育界の危機がここにあるといっても過言ではないのである。

ここに、『講座日本文学の争点』を企画し、上代より現代にいたるまでの日本文学についての問題点を具体的に指摘し、それらの問題がこれまでどのような経過をもって論じられてきたか、どのように解決されたか、また、未解決として残されている問題は何か、それを今後どのようにして解決してゆくべきか、などの解説を試み

た。この講座によって、学界の動向が把握されるとともに、個別的な問題についての十分な理解もなされること
と思う。

本講座は、研究上のみならず、国語教育のためにも、直接間接に役だつであろうことを信ずるものである。

昭和四十三年十一月

目次

上代文学の流れ……………七

上代文学の研究の展望……………橋本達雄……………三

上代文学の争点

日本詩歌の起源論争……………曾倉岑……………五

感情起源説 宗教起源説 折口氏以後の説

記紀の成立と文学性……………太田善磨……………三

記紀非文学論について 積極的な古事記の論 記紀と文学
史的関心 記紀成立論と素材の追求 古事記と女流文学的
要素 記紀を統一体として見るときの視点

英雄時代論争……………佐伯有清……………二三

英雄の発見 英雄時代論の提起 英雄時代論争の展開
問題の所在

祝詞・宣命の問題点……………尾崎暢殃…一四一

祝詞・宣命の発想 「まつり」と「まつりごと」 ノリトの語
義 祝詞の本質 祭典の思想

万葉集の成立と評価をめぐって……………伊藤博…一五五

万葉集の成立がわかりにくくなった事情 平安時代 平安
末期から鎌倉期へ 江戸時代 大正期以後 万葉成立論
の問題点

《問題となる万葉歌人》

人麻呂論の可能性……………吉村貞司…一八九

歌聖論／入詩の本質論▽ 作家論 舍人論 宮廷詩人論
巡遊詩人論 作品論

○虫麻呂論の諸問題……………井村哲夫…三三

作品の所在について 家系について 閨歴および作品の製
作年次について 伝説歌人・叙事詩人 伝説歌・叙事的作
風成立の契機 漢文学との触れ合い 宇合・憶良の所在
スタイル 人間として、作家としての虫麻呂像 作品の評
価

憶良の大陸的思想……………中西進…二四九

文学と思想 仏教の影響 憶良の仏教 儒教と仏教
金光明経 憶良の倫理

家持歌のブランクの謎……………小野寛…二七九

家持歌日記の断絶 天平一七年の空白 勝宝四年の空白
橘奈良麻呂の変 宝字三年擱筆の必然 宝字三年以後の家持

《論争トピックス》

中皇命は誰か？……………山崎馨…三〇六

中皇命とは誰であるか？ 題詞左注の問題と中皇命の訓み方
万葉歌人齐明天皇の誕生

「清明己曾」のよみ方……………稲岡耕二…三三四

万葉集一五番歌の解釈の問題点 「伊理比弥之」の訓み方
「清明己曾」のよみ方 問題としてのこるもの

「上代仮名遣」の消滅……………林勉…三四三

「上代仮名遣」はすでに消滅しつつあった 「上代仮名遣」とは？
「上代仮名遣」一覽 「も」の消滅 「お」「し」「ほ」も二音あつたか 万葉集の混乱 奈良末期から平安初期へ 今後の研究課題

上代文学争点一覧

稗田阿礼をめぐって	曾	倉	岑	奚
童謡の意義	曾	倉	岑	奚
万葉集の意義	遠	藤	宏	毛
額田王作歌をめぐって	遠	藤	宏	毛
卷一・一三番歌の解釈	遠	藤	宏	毛
持統帝吉野行幸の動機	遠	藤	宏	毛
人麻呂歌集の成立について	稲	岡	耕	二
赤人歌の評価	稲	岡	耕	二
卷一四・一五と書き換え	稲	岡	耕	二
竹取翁歌の作者について	稲	岡	耕	二
万葉集の難訓歌	稲	岡	耕	二

上代文学の流れ

一、概観

上代文学の範囲

上代文学は大和時代の文学とも呼ばれる。日本の政治・文化の中心が大和にあった時代の文学という意味である。その終わりは平安遷都（七九四）の時であるが、始めは明確でない。

一般に文学の始まりの時期はぼんやりしていて、はっきりしないものである。

歴史的情勢

日本には一、二世紀ごろ多くの小国家があったが、四、五世紀のころには統一が進み、大和朝廷のもとに一国家となるにいたった。大和朝廷は多くの豪族により構成され、皇室は有力ではあったが、まだ絶対的なものではなかった。七世紀の初めから後半にかけての、聖徳太子・天智天皇・天武天皇を中心とする皇室は、公地公民の制を基礎として皇室の権威を高めることに努力し、天武時代に及んで、天皇は諸豪族に対して絶対的地位を確立するにいたったのである。この新体制すなわち天皇中心の律令国家は、生き生きとした新時代の気分満ちて人々に希望を抱かせた。こうした飛鳥・藤原朝を受けた奈良朝は守成の時期で、前代の成果を受けつぎ、かつて無い繁栄を招き、名高い天平文化を生み出したのであった。一方、その繁栄の陰に、経済的困難による律令制の危機や貴族の間における政権争奪の陰謀が重なり、文化の爛熟とともに、奈良朝の中期を創造の活気に欠けるものたらしめたことも見のがすことはできない。末期の光仁天皇の改革はそうした行き

づまりを打開しようとしたものである。なお、大化改新や律令撰定に大きな功績のあった藤原氏が、外戚として皇室と深い関係に立ち、後の摂関政治の基礎をすでに築いていることも注意すべきである。

大陸文化の輸入

大陸との接触は記録以前からあったが、三世紀から五世紀にかけては、国の使いがたびたび行くほどにまでなっていた。その後、七、八世紀には遣隋使・遣唐使が約二〇回も派遣され、大陸文化がきわめて熱心に輸入された。国家の基礎をなす律令や都の造り方に見られる中国の影響は著しい。書籍も多方面のものが輸入され、官吏の登用試験には文学書も課せられるような状態であった。思想方面では儒教が採られたが、老莊思想も相当愛好されている。仏教もはいつてきて、聖德太子・聖武天皇をはじめ熱心な信者を得て、法隆寺・東大寺その他、寺や仏像が盛んに造られた。この時代の仏教は上層の人々には鎮護国家のため、行基の周囲に集まったような下層の人々には生活難打開のためのものと意識され、思想的根底はまだ深くなかった。おびただしい大陸文物の流入のうち、文学に画期的な影響を与えたのは漢字の輸入で、漢字は日本人としてはじめて文学を書きしるすことを可能ならしめ、また平假名・片假名を生んで平安時代以後の假名文学隆盛の原因をなしたのであった。

文学の様相

上代文学には、もっぱら口承にたよっていた長い時期がある。口承文学は集団から生まれ集団により味われ、また口承であるために流動変化する。この口承文学の勢力は、漢字の使用と個の自覚とによって減少していった。個の自覚は、個性的創作を生み、漢字の使用は文学から流動性を奪った。古事記・日本書紀・風土記は口承文学の固定の例であり、万葉集の和歌は個性的創作の誕生と成熟とを示している。懷風藻の詩も、漢文学の模倣は著しいが、個性的なものに数え得る。かくて、上代文学は、民族的に深く広い基盤を有する口承文学の比重の大きさと、生まれ出たばかりの若々しさと成熟の美しさとを備える個性的叙情詩の隆盛とをもって特徴とするのである。

二、神話・伝説・説話

神話・伝説・説話は広義の説話に属し、もともと口頭で語られたものであるが、古事記・日本書紀をはじめ、常陸・播磨・出雲・豊後・肥前各国の風土記および諸国風土記の逸文、また古語拾遺などに記載されて、現在まで伝わってきた。口承時代に話の筋や表現に変化があったことはいうまでもなく、また右の諸文献の成立する際にも、漢字を用いなければならなかったことや、程度に多少はあってもいずれも漢文風の文章で記されたことなどのために、もとの姿をそこなった点多かったのではあるが、日本民族の有する最古の叙事文学として高く評価されているのである。

神話

神話は宇宙・人類・自然・国家・文化の創造とか生死の起源などを、神格のはたらきを中心として述べたものである。時間的にも空間的にも超現実であり、後世から見れば不合理に思われる点が多いが、古代人にとってはそれが真実なのであり、宇宙その他に関する古代的解释がこれによってうかがわれるのである。日本の神話は、出雲国風土記の国引きの神話のようなまれな例もあるが、ほとんど古事記上巻・日本書紀神代紀および古語拾遺に載っている。古語拾遺は平安時代（大同二年六七）になってからの成立であるが、古事記・日本書紀は、天武天皇の詔に基づいて編纂され、前者は稗田阿礼の誦習しておいたのを太安万侶が書きしるして和銅五年（七一二）に上中下三巻として撰進したもの、後者は舎人親王を総裁として編修し、養老四年（七二〇）に三〇巻に系図一卷を添えて奏上したものである。古事記の方が国語の文脈を生かそうと努めており、日本書紀は漢文風である。また日本書紀の方が異伝を忠実に載せているのに対し、古事記は一つの伝えで貫き通している。総じて古事記の方が文学的香気に富む。

記紀の神話には天地の開闢、国土の創成、神々の誕生、国家の起源、皇統の優越などが語られており、自然神話には重点がおかれていない。これは天皇の絶対的權威の確立された時期に、皇室の權威を証することを目的として編修されたためで、記紀の神話の語るところによれば、皇室の祖先は国土・人民すべての祖先であり、皇室は、開闢の初めから尊い位置を保持するものである。神代の物語は皆この一線に結びつくようになっているので、日本の神話はまれに見る整った体系を持っている。しかし、元来これほど統一されたものではなく、自然や人事におけるさまざまな事象に対する古代人らしい解釈や想像から生まれた神話が、もっと素朴に生き生きと語られていたであろう。その名残りは整頓した体系の各所にまつわって、いどりと潤いとを増しているのである。また前にも述べたとおり、口承時代の姿はおおむね失われたが、部分的には残っていて古代的な美しさを香らせている。

記紀の神話のうち、よく知られているものには、伊邪那岐命の黄泉の国訪問と楔、天照大御神と須佐之男命との宇氣比、八岐大蛇退治、大国主神の根堅州国訪問、高天原と出雲との交渉、木花之佐久夜毘売と石長比売、海幸彦と山幸彦などの話がある。

伝 説

伝説は神話に比べて時間的、空間的に現実性が強く、特定の時代や地域に結びついていて、主人公も歴史的に顕著な人物や英雄などである。しかし、歴史的事実に固着するのではなく、経験的事実に想像や仮構が加わっているのである。古事記の中巻・下巻や日本書紀の神武紀以後には伝説が多く載せられている。両書の性質から、主人公は天皇・皇后や皇子・皇女であるのが普通で、とくに神武天皇や倭建命をめぐる伝説は精彩を放っている。これらは大和朝廷の東西への発展という長期間にわたる事実を、ある人物の一回かぎりの功業のように述べるといふ、神話や伝説の常に取りする方法によって語ったものである。

ほかに神功皇后・応神天皇・仁德天皇・輕太子および輕大郎女・雄略天皇・顯宗・仁賢兩天皇などをめぐる

征戦・聖徳・恋愛・闘争などの物語が名高く、古代人の激しい生活の息吹を伝えている。

説話

説話の主人公は神や歴史上の人物とは限らず、動植物や無名の人物であることも多く、神があらわれても尊厳を欠いた俗化された神である。また説話の時間・空間は、現実的、超現実的いずれでもよく、事件は神話や伝説とちがって断片的であることが多い。それだけにまた庶民の願望や事象の解釈や生活感情などをよく物語っている点がある。記紀に散見するほか、とくに風土記に多い。風土記は和銅六年（七一三）の官命に基づいて撰進された地誌で、前記五国のものが古いが、その正確な成立年代は不明である。ただ奈良時代初期に成立したものであることは明らかである。地誌としての性質上、風土記の説話は土地を中心としており、とくに地名説話が多い。文章は、古事記のように国語を生かそうとする傾向のものもあり、著しい漢文的な美文調のものもある。

なお、仏教説話集の日本霊異記も、平安時代初期の成立ではあるが、外来説話の翻案とともに、上代庶民の生活意識をうかがわせる話を多数載せている。

説話と文学

説話（広義）は起源的にはきわめて簡単で、文学の名に値しない程度のものであったが、記・紀・風土記に採られた有名なものは、構想からいっても表現からいっても、叙事文学と呼ぶにふさわしいものになっている。個人の心理に立ち入った描写などは無いが、事件の叙述の中に集団社会の精神や心情が投影している。上代説話文学のうち、後世に長く影響したものの、外国に類型を有するものとしては浦島説話・羽衣説話（白鳥処女説話）・三輪山説話などがある。

三、祝詞・宣命

祝詞も宣命も後世まで作られているが、文学史的に意味のあるのは上代のものだけである。上代文学として扱われる祝詞は、延喜式卷八所収の二七編と台記別記に載っている中臣^{なかつみの}寿詞とであり、宣命は続日本紀所載の六二の詔と逸文三編とである。延喜式も台記も平安時代の成立であるが、祝詞そのものの由来は古い。宣命は、文武天皇以後桓武天皇の初期までのものである。これらは神に奏上し、天皇の意志を宣下^{せんげ}するという性質上、読み誤りのないよう表記にも注意がはらわれ、古い口頭語を伝えており、また上代人の信仰や思想をよくあらわしている。

祝 詞

延喜式の祝詞には相当長いものがある。しかしこれは発達してからの形で、七世紀前半までさかのぼれるかどうか疑わしい。祝詞の祖先は簡単な呪文だったらしく、それから次第に発達して、神の名を唱えること、その理由、祭りをする理由、祭神の素姓や業績の説明、捧げ物の列挙、祈願する事などがらを備え、序や結びの加わった形が完成し、祝詞特有の修辭法によって長大化したのである。呪文も祝詞も、ことばの力によって神のはたらきを呼び起こすのを目的とする。祝詞が祈願する神のはたらきは、豊年、御世^{みよ}の長久、宮地宮殿の安泰、災害や悪霊邪鬼の防禦、罪やけがれの祓^{はら}いなどが主なもので、皇室・国家の繁栄と民生の安定とを願い、清浄な身心を欲する心が見られる。法律的、倫理的な罪のほかに肉体的欠陥をも罪として祓い除こうとするところには、現在と違う罪の觀念と、健全さへの強い願望とがうかがわれる。皇祖神を尊ぶのはいうまでもないが、そのほかさまざまな神が祈られ、祈願の対象が唯一の神でないことも注意すべきである。祈願が満たされた感謝を述べる祝詞もかなりあり、捧げ物をする^{をさ}ことだけを奏するもの数編、また神ではなく天皇に対して忠誠を誓い繁栄を祝う寿詞も、少数ある。祝詞は、その性質上、日常と違ったつつしんだ気持ちで読み上げられるものであり、神の意にかなうような莊重な美しさを持つものでなければならぬ。この朗誦性と莊重美の要求とが、反覆・対句・列挙・譬喩などの修辭を生み、祝詞独特の文章を生んだのである。その修辭は万葉集の長歌にも影響を与えたと言われている。

宣 命

宣命も古くからあったわけであるが、普通に続日本紀にあるものをいうことは前に述べたとおりである。これは国家的な重大事件のあった時に発せられた国文体の詔で、即位・讓位・立后・立太子・廢太子・改元・賞賜・処罰・免罪・告諭などに際してのものが多く、高天原以来の皇統を受け継ぐ天皇を現人神とする思想のほかに、儒教的な天の思想、祥瑞思想、三宝や菩薩を尊ぶ仏教思想などの外来思想が見えてくる点に祝詞と違って、時代の姿を反映している。東大寺の盧舍那仏に対して産金を感謝した宣命さえある。しかし、これら外来のものも国家・皇室を危うくするものとしてではなく、これを庇護し恩恵を与えるものとして受け取られていた。宣命は君と臣との間のもので、祝詞のように神と人との間のものではないだけに、事ながら具体的に、文章も感情をはっきり出しているものがある。逆臣への叱責、功臣への愛寵、一般への告諭や説得などはその例である。

宣命には、明き^あ浄き^{きよ}直き^な誠の心^{まこと}という類のことばが時々でてくる。これは君に仕える心がまえとしてではあるが、祝詞の祓の思想や万葉集の歌を貫流する清冽さと照らし合わせてみると、上代日本人がいつそう広い意味で明・浄・直を尊重し愛好していたことがわかるのである。

宣命は「天下乃公^{あめのみ}民^た乎^な恵^あ賜^{たま}比^ひ撫^な賜^{たま}牟^む止^と奈^な母^も」というように助詞・助動詞や用言の語尾などを万葉假名で小さく書く。これは祝詞も同様であるが、宣命書と呼ばれる。読み誤りを防ぐ便利な方法であって、後世の假名交じり文の先祖にあたるものである。

四、上代歌謡

日本のうたを大きく分けると歌謡と和歌とになる。歌謡は口でうたい耳で聞くもので、きわめて古い時代から

現在にいたるまで相当な勢力を保持し続けているが、とくに上代歌謡は、古い口承文学の有力な部分をなし、日本文学の起りや集団文学の性格の問題に深いかかわりを持ち、また和歌發生以前の謡い物全部を含み、和歌の母胎をなし、和歌發生後も他のどの時代よりも和歌と密接な交渉を持つなど、文学史的に大きな意義を有しているのである。現在伝わっているのは、古事記・日本書紀・風土記・続日本書紀・琴歌謡・仏足石歌碑・日本靈異記その他に載っている約三〇〇首であるが、実際に歌われたものの大部分は失われてしまったと思われる。残った約三〇〇首は書物および碑の性質により制約を受けていて、必ずしも上代のうたの完全な姿を示しているとはいえないが、荒削りな表現の中に素朴でたくましい生活の息吹きを伝え、和歌とはまた違った美しさを有している。なお、万葉集にもかなり多数の歌謡があるが、それについては万葉集の項で触れることにする。

歌謡の起源

うたの始まりは、ごく簡単な感動的なことばであつたらしい。神祭りの際、労働の時、感動した瞬間などに発せられる意味のない掛け声から、ことばに、さらにことばの連なりにと発展して、うたが生じた。その原始的段階のものはおそらく伊邪那岐・伊邪那美二神の唱和のようなものであつたろう。今残っているものでは、神武天皇の軍隊の勝利の歌と伝える八今はよ今はよああしやを今だにも吾子よ今だにも吾子よ（神武紀）や天石戸のあいた時の歓喜の歌という八あはれあなおもしろあなのしあなさやけおけ（古語拾遺）などが古い段階に属すると思われる。

歌謡の場

宮廷（とくに酒宴）が歌謡の場として大きな位置を占めているのは、現存上代歌謡の大多数が記紀に載っていることにもよろうが、またある程度実際の状態を示すのであろう。和歌の世界でもこの系統の歌が重要な流れとなっていることから推量できる。記紀ではまた戦争の歌、恋愛の歌が目立つが、前者は和歌にはほとんどない。庶民の歌謡の場としては、労働があつたが、労働歌の内容は恋愛であることも多く、現在だけが労働歌であるかは見わけがたい。はっきり庶民の歌謡の場と知られるものに歌垣があ